

「高等学校国語・新学習指導要領」に関する見解

平成30年に告示された新学習指導要領において、国語科必修科目は「現代の国語」と「言語文化」に、選択科目は「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」の4科目に分かれているが、これらの科目を「論理的な文章」「実用的な文章」を扱うか、「文学的な文章」を扱うかによって区分する基準に対し、われわれは深い憂慮を覚えるものである。「論理」「実用」と「文学」とを対立概念として捉えることは元来不可能である。また、個々の教材を「文学的」であるか否かによって区分することもまた不可能である。

日本語の歴史とともに歩んできた「文学」は、人間の存在意義や尊厳と関わる人文科学、社会科学全般と密接に関わっている。「文学」を狭義の言語芸術に限定し、囲い込んでしまうことによって、言葉によって新たな世界観を切り開いていく「人文知」が、今後の中・高等教育において軽視され、衰退しかねない危惧がある。

上記の観点から、新学習指導要領の実施にあたっては、単位の認定、教科書検定等に際し、「人文知」の軽視されることのない、柔軟な運用を行うことを強く求めるものである。

2019年（令和元年）8月10日

古代文学会／西行学会／上代文学会／昭和文学会
全国大学国語国文学会／中古文学会／中世文学会
日本歌謡学会／日本近世文学会／日本近代文学会
日本社会文学会／日本文学協会／萬葉学会
美夫君志会／和歌文学会／和漢比較文学会

（五十音順）

〔付記〕

新学習指導要領の実施にあたっては、4科目のいずれかに偏ることのない環境が形成されることを切望する。

日本文学協会